

病院だより

医療法人藤樹会 滋賀里病院

所在地：〒520-0006 大津市滋賀里1-18-41
電話番号：077-522-5426
診療科目：精神神経科
引きこもり外来、高次脳機能障害外来、思春期外来、うつ病外来、睡眠外来など。
病院長：栗本 藤基

私が独自に憲法前文を書く理由

浅学菲才を承知で、私なりの案を創ってみた。諸賢の御意見、ご指導を願う。

その理由

1. 福沢諭吉は「一人の独立なくして一国の独立はない」と言ったそうだが、明治憲法発布前には、多くの国民が自主憲法を創ったという歴史が日本にはある。

2. 手段先行の議論：現行の憲法審査会などの議論では、自衛のための武力が云々という、手段のレベルの議論が先行。日本の敗戦原因も見つめず、世界の現実を直視せず、美辞麗句を基本にした現行の「前文」そのものを議論しない風潮を危惧している。明治維新は日本が近代国家への出発点だといえるが、その時、原点としたのは五箇条の御誓文であった。しかし、日本が目的としたものが不明瞭だった。明治憲法でも天皇の目的は国内統治が主であり、世界への使命は積極性に欠く。

3. 押し付けられた憲法云々という議論もある。ならば代案はどうか？自民党の前文には、この現代の世界状況に積極的役割を果たしたいという気概は感じられない。

4. 私自身の視座から；私は昭和20年5月3日の生まれである。その前月には戦艦大和が特攻出撃し、沖繩近海で撃沈されている。また、学徒による自身を最後の砦たらんとしたの米軍艦隊への特攻出撃。ポツダム宣言受諾後、満州北部に迫るソ連スターリン戦車に火炎瓶を抱え、その南下を食い止めようとした学徒兵のことを思わずにはいられない。信州の上原良治は「日本が滅びて後、大英帝国の如く偉大な国に蘇る、その捨て石に自分はなる」と書き残したが、戦後に生きる日本人として自身に問わざるを得ない。戦前から戦後の接点に生まれた人間の使命と責任を感じる。米国の武力のみならず、判断力（国民の総力結集）の強さ、豊かさに日本は負けたのだ。日本人の判断力の狭さが敗因だ。敵を知らず己を知る力に欠けていたのだ。

5. 精神科医の視座から；私は精神科医を三つの視点から考えている。病めるを治す下医、未だ病まざるを正す中医、国家の病を癒す上医だ。

まず「下医」として、最も独立力の低下した人々の回復、まさしく、独立心の復活に向けて関わっている。眼前に見た患者の大半がその病前において目的喪失、独立精神の低下した存在である。つまり、様々な要因により、判断力の低下、貧困状態に陥り、自身で復元できず、生存、生きる目標を失った人である。言い換えれば人間の基礎が危うくなった存在の建て直しと強化への関与が私の課題だ。人格が弱くなり自閉、分裂、依存状態になった存在である。彼らに独立自尊の精神を呼び起こすことが、根本課題である。人間の独立の基礎に必要なのは真善美（これらには閉ざされた精神を開く力がある）の提供である。「真実の情報の提供」「真に患者の利益になること」「心を豊かにする芸術」の提供である。これらによる判断力の強化が基本である。私は人間とは社会存在、歴史存在、自然存在と考えている。この社会で行き詰った精神病患者も、その歴史を辿り直し、自然との直接的な関りによって、自己回復が可能と考え、実践してきた。

さらに「中医」として病院そのものの精神病性の改革が課題だった。病院自身が収容所的で自然と歴史と社会、世界に開かれてはいなかった。その視座から改革に取り組んできた。人格面で自閉、分裂、依存状態に陥った精神病患者を先ずは預かることが基本であった。しかし、さらにその心を閉ざし、他者との分裂、依存化対応をしていた。受け継いだ私は、先ずは自閉から自開、統合、独立への道を開くべく、多くの優れた独立存在^(※1)に学びながら関わってきた。農、武、医、文（真善美）を軸とした人間精神の向上、判断力の強化を目的とした、精神の道場としての病院創りであった。さらに「中医」として求められるのは教育の改革だ。都市、工業社会、分業社会に適応できるのみならず、大地自然と歴史に立脚し、自己統御、自己防

衛力の強靱な精神を養成する目標の下に、教育者の質的改革が求められる。

(※1)中村天風(医学哲学統一道)、玉井袈裟男(風土舎)、吉本伊信(内観)、岡村昭彦(国際報道写真家)

「上医」として、

A. 戦前の日本が精神病状態：父が「大東亜戦争の敗北は日本精神の衰弱にある。」と言ったが、目的意識が不明確であった。前妄想状態の日本。この視点から大東亜戦争の意味を先ず考える必要がある。欧米列強の東洋進出に対する被害感情から、自己防衛力を高め、大東亜共栄圏を築こうとした。が、アジア民衆の向上に資する力に欠けたのみならず、米国の反発を招き、圧倒的な力で、その野望を潰されたということだ。国民一人ずつが、天皇制国家の情報統制の中、独立した判断力を奪われていた。そこに日本敗因の根本がある。せつかく「日の丸」や「昇天旭日旗」を掲げながら、世界の太陽たるまでの徹底強化した思想にまで至らなかった。

B. 戦後の日本：心神喪失状態の日本：戦後の日本は、米国の保護下に入り、独立自尊の精神すら失った。国家間において、被害感情から加害者化し、自己統御力が低下し、自他破壊の危険を有する存在と米国からみなされたといえる。大東亜戦争の敗北直後の世界情勢の中で生まれた日本国憲法は、その前文にある極めて楽観主義的な世界観と、自虐的日本人観を核に、しかも判断力を喪失していたが故に、米国人の手になる案を鵜呑みにせざるを得なかったために、このような憲法になったと考えられる。

自主憲法をもてず、米軍依存の状況は、日本が敗北のみならず、根底からの独立精神すら奪われた状態から、未だに脱却し得ていないことを意味する。それ故未だに国家目的、目標の議論がなされないのだ。憲法の前文には、先ずは近代日本の出発の精神に戻る必要があろう。その上で、どういう日本、どういう日本人の理想像が示されるかが先ず問題だ。その上で、それを達成するための手段が明記されなければならないと考える。現実の日本は人口減少、経済の衰退のみならず、一人ずつの日本人自身が大地から離れ、歴史から離れ、判断力そのものが極めて危うい存在にあると言わざるを得ない。

C. 現代世界が精神病状態(世界の危機)：現代世界はどうか。宇宙空間は百億光年より広い中、地球は誕生して四十六億年、生命の誕生は三十五億年も遡ることができ、さらに生命の核たる遺伝子操作が可能な時代、さらにコンピューター技術の飛躍的發展により情報の活用は生存の幅に大きく貢献できる時代に生きている。にもかかわらず、あらためて国家の独善的価値を主張し、戦争を起こす国(ロシア)が二十一世紀に出現するとは誰が予測したか。被害妄想から加害者化し、悪循環からの脱却が困難な自他破壊の危うき状況にあり、世界を破壊に導く危険すらある。また、地球規模の温暖化は、森林火災、大洪水の発生。食糧供給の減少。感染症の勃発を招いている。さらに人間の利己欲による核戦争の勃発の危惧、特に情報戦争は、我々の判断力を歪めかねない。結局地球そのものの持続性が問題になる時代に生きている。この無秩序化した世界を統御し得る筈の国連機能も衰退している。つまり、現代世界自体が精神病化し、自己破壊の道に進んでいる。これを全身で感じ、身をもって警告したのが、我が弟 正剛であった。50年前の事だった^(※2)。いまや、その予感は現実のものとなりつつある。

D. 世界の危機に対処し得る日本は果たしてどうか?：日本はかつて自身の生存基盤の崩壊という大東亜戦争の悲惨なる敗北を帰した。が故に、このような世界を把握し統御し、人類の未来に貢献できる使命を有するといえる。しかし、世界の現実の危機に対して、このような時期に当たり、日本はどう進むべきか。日本の危機的現実を見つめ国家の方向を定める憲法は、今後の日本の将来をどうするかにかかる極めて重要な課題であると考え。世界史の危機に立ち向かえる日本の再興を目指すものでなければならない。大自然の恵みと狭い国土を耕し、外敵に立ち向かった先人の歴史を踏まえ、調和的国家を創ってきた日本は、世界統一国家のモデルとならなければならない。諸国家、諸宗教を統合し得るのは、太陽である。暗黒から解放し、何億年も生き続け、また、未来に向かって生き続ける太陽こそ、先ずは人類統合の力の源泉といえよう。これを踏まえて判断力の豊かさ、強靱な国家、遠大な理想を有する国が目標でなければならない。

憲法前文草案(私案・試論)

前文：日本は東に太平洋、西にアジア大陸を望む位置にあって、南北に四つの島からなる。大いなる海の恵みと、大地の恵みに依拠してきた。四季の変化の豊さに加え、山紫水明、気候温暖にして、互いに相励み狭い国土に生きるための勤勉さと協同精神は日本人の特質である。根底には太陽を神(天皇は司祭)とし、中国の儒教やインドからの仏教を精神の拠り所としてきた。特に徳川三百年の封建体制の狭く閉ざされた精神の危うさに気づき、外国の圧力をばねに、明治初頭國を開いた。五ヶ条の御誓文の精神を核として世界に開かれた統一国家を創り上げた。その世界に対しての開かれた精神、日本の独立精神、さらに、世界と日本を統合して考える、つまり、世界の利益と日本の利益を合致させようとする精神であった。

その後、日本の存亡を賭けた日清日露戦争では、何とか体制を保持発展に導けた。しかし、今般の大東亜戦争で敗北を喫した。大東亜共栄圏構想の中核たる日本の伝統思想と西洋思想の統合は十分でなく、近隣アジア人への説得力を欠くものであった。西洋思想を統御し得る日本精神の脆弱さに問題があった。一言でいえば、健全なる独立自尊に基づく判断力が国民に欠如していたのだ。或いは自身の判断力の低下のため、多くの国民は、何の為に戦うか、何を目指して行動することが善であるのかわからないまま、戦地に向かっ

たのではなかったか。

あらためて天地の公道を司るのは、正しく太陽である。しかし太陽神の司祭である天皇そのものが万民を照らす力に欠けていた。のみならず、国民はその天皇に依存していた。つまり、「日の丸」を掲げていたにも関わらず「太陽精神」は貧困であった。つまり、太陽が万民を暗黒から解放し、生きる生命の源としての力を人類に降り注いでいるが如く、一人一人の日本人はあらためて、この人類を照らす太陽精神を体現せねばならぬ^(※3)。知識を世界に求めず、極めて偏っていた。世界の現実に対して、表層的な見方であったと言わざるを得ない。個々の志は世界に開かれず、人類に貢献する積極精神からほど遠かった。万機公論に決することなく、一部の勢力に偏り、公論に徹していなかった。上下心は一致していなかった。結果、敗戦により、心神喪失状態に陥った。この悲惨を見つめることから偉大への道が開かれるのだ。つまり方向を見失い自閉、分裂、依存化した日本自身を見つめなければならない。その上に立って自身を開き、周囲と統合し、世界に対する独立性を自覚せねばならない。さらに、大自然（宇宙内）と世界歴史を踏まえ、世界を広げ、世界を統合し、世界の人民の個々の独立向上に資するためである^(※4)。しかし、今や世界の現実が多次元的かつ弱肉強食の時代に逆戻りし、個々の欲望の制御は困難であり、人類の永続性の危機すら生まれている。つまり、世界統御の精神的支柱たる国はない時代に突入した。だからこそ「遠大にして強固なる理想（目的）を基に健全な判断力のある国家が求められているのだ。」まずは日本人自身の独立自尊は全ての必要条件である。これらの力を備えた国創りが目標でなければならない。あらためて日本の位置と方向を定め、自身を強化し、世界の統合調和への志をもたねばならぬ。その指標としての自主憲法を制定せんとする必要がある。

つまり、大自然と歴史を尊重し、世界を照らす日本人として、この憲法を創るのである。

参考文献

五ヶ条の御誓文

（私は順序を変えるべきと考える。1. 旧来ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クヘシ。2. 智識ヲ世界ニ求メ大イニ皇基ヲ振起スヘシ。3. 上下心ヲ一ニシテ盛ニ経綸ヲ行フヘシ。4. 官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ケ人心ヲシテ倦マサラシメンコトヲ要ス。5. 廣ク会議ヲ興シ萬機公論ニ決スヘシ）に謳われた。

「日本憲政史の研究」尾佐竹 猛（一元社。昭和18）

五箇条の御誓文が明治憲法に反映されなかった経緯が記載。御誓文は王政復古の視座が主流であり、伊藤博文はプロシア憲法を参考にし、目的は西欧諸国との条約改正の為にも国内統治にも明治憲法を制定する必要があった。近代国家日本の世界的役割を目途として明治憲法を創ったのではない（筆者）。つまり、天皇は世界に対して積極的役割を果たす思想はなかった。元田永孚の上奏意見書：「憲法ハ即チ天地、公道ニ基ツキ祖宗ノ国体ニヨリ古今ノ民情風俗ヲ適度シタル憲法ナリ、是他ナシ即チ推古帝ノ憲法ヲ拡充シ大化大宝ノ制度法度ヲ潤色スルナリ」

昭和十三年十二月八日の廣田内閣の教育審議会

皇国ノ道ノ修練ヲ旨トシ、…国民精神ノ昂揚、知能ノ啓発並ビニ体位ノ向上ニ力メ、知徳身心ヲ一体トシテ国民ヲ錬成シ、以テ内ニ国力ヲ充実シ外ニ八紘為宇ノ肇國精神ヲ顕現スベキ次代ノ大国民ヲ育成センコトヲ期シタ

*八紘為宇：全世界を一つの家にすること。（淮南子：地形訓。日本書紀：兼六合、以開都、掩八紘而為宇）

昭和十五年三月

国民科地理ハ国土国勢及諸外国ノ情勢ニツキテソノ大要ヲ會得セシメ国土愛護ノ精神ヲ養ヒ東亜及世界ニ於ケル皇国ノ使命ヲ自覚セシムルコト

大東亜が本来は地理上は一つであり、日本が統一の中心だと教えた。しかし、このような教育では、大西洋は世界地図の両端で二分されていた。（新世1975岡村昭彦集 4 筑摩書房「われわれはどんな時代にきているのか」）・・・世界統合の視点が欠如の意（筆者）

大日本帝国憲法

前文：朕、祖宗の遺烈を承け、万世一系の帝位を賤み、朕が親愛する所の臣民は、即ち朕が祖宗の恵撫滋養したまいし所の臣民なるを念い、其の康福を増進し、其の懿徳良能を發達せしめんことを願ひ、又、其の翼賛に依り与に俱に国家の進運を扶持せんことを望み、・・・国家統治の大権は、朕が之を祖宗に承けて、之を子孫に伝うる所なり。・・・朕が現在及将来の臣民は此の憲法に対し永遠に従順の義務を負うべし

現憲法

前文：国民主権、基本的人権の尊重、平和主義：平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、我らの安全と生存を保持しようと決意した。

(※2)「アレキサンダー大王に捧げる歌」（風景社）

(※3)F.ニーチェ「ツァラトゥストラはかく語りき」（河出文庫）

(※4)安藤昌益「自然真道論」（講談社学術文庫）

医療法人藤樹会 滋賀里病院 栗本 藤基